腹部大動脈瘤を伴う多発性外傷患者の一例

藤野恵三（輸血部門:大阪市立大学医学部附属病院　輸血部）

約20年前から不整脈のためペースメーカーを使用、高血圧、腹部大動脈瘤の既往のある 78 歳の男性が自宅の階段から転落、頭部・顔面多発性挫傷・左膝を損傷し、前頭部からの出血等でショックを来たした状態で救急搬送されてきた。

外来処置により止血・縫合閉鎖、入院後も症状は安定していた。

入院 6 日目に腹部大動脈瘤が破裂、緊急で人工血管置換術が施行された。

術後の低血圧に伴い、両足が ASO によると考えられる血流障害のため壊死が進んできた。入院 10 日目には同部位が原因と考えられる敗血症が進んだ。全身状態を維持するためには今後両下腿の切断が必要と思われた。

©大阪府臨床検査技師会　学術部